夜想曲

てん

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=13018123

DQ11, カミュベロ

こんにちは、わたしです。
これは、多分カミュベロです。そう、多分。
書いていくうちにどんどんカミュが暴走してしまってどうしたら良いか分からなくなりました。
わたしからカミュを叱っておきましたので、ご容赦くださいね。

いや、ほんと、これカミュベロなんでしょうか…そう己に問いかける日々です。

夜想曲

邪神討伐を掲げ、幾度ネルセンの試練に挑んだことか。もう少しで迷宮の再奥まで手が届きそうではあるが、勇者一行は暫し休憩を取ることを決めた。
手応えはある。このまま挑戦を続ければ、そう遠くないうちに邪神を打ち倒すことが出来るであろう。
そうは言っても年若い者達も多いこのパーティーで、毎日毎日鍛錬に打ち込むというのも酷なものであった。特に、若返ってしまった幼いベロニカの体力は限界を迎えていた。
「よし、休もう！」
正に鶴の一声。勇者のその一言で一行は疲れた身体と精神を癒やすべくダーハルーネの街に訪れた。
色々と苦い思い出もあるダーハルーネだが、街は活気があり栄えているし、港町だけあって様々な物や人が集まっていて、街をぶらつくだけでも面白い。また、町長が大変良くしてくれるのもこの街をついつい訪れてしまう理由の一つだろう。邪神復活の影響はこの明るい街にも確かにある。それでも活気を保つこの街が一行は好きだった。
早速宿を取り、顔馴染みと話を咲かせた勇者達は各々別行動を取ることにした。
シルビア、マルティナ、双子はスイーツ巡り、勇者とカミュ、グレイグは買い出し後自由行動。唯一ロウだけは宿で寝ると言って早々に部屋に引っ込んでしまった。
「年寄りのことは気にせんでええわい。皆、楽しんで来ると良い」
そうフォローをするところは、流石年の功だった。

「さあ、行くわよ〜！」
と言うシルビアの掛け声と共に女子会は開催されたのだが、早々にベロニカは参っていた。元より甘い物はそんなに好きではない。少しだけならまだしも、はしごに次ぐはしご。襲い来るスイーツ地獄にベロニカはとうとう音を上げた。

「あたし、ココらへんでお暇するわ。宿でゆっくりするから後は皆で楽しんで」
ニコリと一つ微笑んでベロニカは席を立った。周りの女子達から残念がる声、引き止める声をかけられたが、そもそもベロニカの回復を主にした休息だった為、皆強くは言えず、その小さな背中を見送った。
そう言って席を立ったベロニカだったが、折角の休みだ。人里に来るのも久しぶりだし、真っ直ぐ帰るのも勿体無いと、寄り道をして帰ろうと橋を渡る。今思えばそれが間違いだったのだ。あのまま宿に帰ればこんな胸がムカつくような場面に出会わなくても済んだのだし、ベロニカも傷つくこともなかった。

ベロニカの視線の先には青い髪を逆立てた男、カミュが居た。相も変わらずキレイなお姉さんに声をかけられているようだ。その光景を目にして、ベロニカの感情がささくれだつ。こんな場面を何度となく見てきた。確かに顔の良い男ではあるが、毎回毎回飽きもせずよくやるものだ。
突撃して、文句の一つや二つ、いや、それ以上言ってやっても良いのだが、如何せんベロニカは疲れていた。目にした光景にげんなりして、ウインドウショッピングをする気も消え失せる。
もうここは真っ直ぐ帰ってゆっくりしよう。きっと神様もそう仰っているんだわ。
苛つく気持ちを無理矢理落ち着かせ、くるりと踵を返した途端、背中越しに声をかけられる。
「ベロニカ！」
どうやらベロニカをだしにして、断る算段なのだろう。後ろから妹が迎えに来ただの何だの、面白くない言葉が漏れ聞こえる。
ベロニカを利用してしつこいナンパを撃退したのか、カミュが駆け寄って来て、頭をコツンと小突いた。
「お前、見捨てるとか薄情な奴だな」
気付いてた癖に、とのたまいながらベロニカの頭をかいぐりかいぐり撫で回す。
「やてめよ！楽しそうにしてたから、邪魔しないようにしてあげた

んじゃない！」
「お前アレが楽しそうに見えたのか？目ちゃんと開いてますか〜？」
「なぁんですって！？ふんっ！鼻の下伸ばしちゃって情けないったら！」
そう言い放ち、憎い男のつま先を思いっ切り踏んでやる。
「いっ…てぇ！！何すんだ、このクソガキ！もっとお淑やかに出来ねぇのか！」
「なによ！あんたがさせてくれないんでしょっ」
「…お前なぁ！嫉妬もここまでくると可愛くないぞ！もっと可愛くヤキモチ妬けないのかよ！」
「ヤキモチ…？ヤキモチですって！？」
「そうだよ！はん！セーニャだったらもっと可愛く妬くんだろうがな！」
なんでそこでセーニャだ。
突然の妹の名前に吃驚して言葉が詰まる。ヤキモチとか、可愛くないとか、そんなことより妹を持ち出されたことの方が余程ベロニカの心に刺さった。
なによ、なによ！カミュのばか！セーニャは関係ないでしょ！
そう言ってやりたいのに高まった感情に涙が出てきそうになって、ぐっと唇を噛んで我慢する。口喧嘩した挙句泣きそうになるなんて、そんな子供みたいなこと絶対したくない。したくはないが、このまま口を開くと十中八九涙が溢れてしまうだろう。そこでベロニカは渾身の力を込めて、憎い男の腹めがけて頭突きをお見舞いしてやった。
突然の反撃にカミュは抵抗出来ずにマトモに頭突きを腹に喰らう。
「…っ！…！？」
カミュが怯んだ隙に、ベロニカはくるりと翻って駆け出した。「カミュのばぁーか！！」と捨て台詞を投げつけることもしっかり忘れなかった。

そのまま宿の自分の部屋に飛び込んで、ベロニカはとうとう嗚咽を漏らした。手で顔を覆って、感情の波が落ちくのをひたすらに待

つ。セーニャはまだ帰らないだろうが、奮発して個室を取って良かった。こんな場面見られたら言い訳も出来やしない。
なんでこんなに悔しいの？
ベロニカはその答えを持ち合わせていなかった。確かに妹なら可愛くヤキモチを妬くだろう。自分と違ってあの子は良くも悪くも真っ直ぐだ。真っ直ぐに相手にぶつかって、そのまま心も掴むのだろう。そもそもヤキモチとはなんだろう。
あたし、ヤキモチ妬いてたの？
そう自分に問いかけるが、やはり答えはでない。
こんな感情は知らない。こんなに自分を乱されたことはない。
ひっくひっくと肩を揺らしながらのそりと立ち上がり、備え付けの鏡台の前に立つ。そこには涙をポロポロと溢し、頬と瞳を真っ赤にした幼子が立っていた。
その姿にベロニカはゾッと血の気が引いた。
なんだ、この弱々しい姿は。お前は勇者の導き手。誇り高きラムダの巫女だろう。
普通の女の子だったらこれでも良い。ちょっとしたやり取りに傷付いて、涙を流すのも良いだろう。しかしベロニカは自他共に認める勇者の導き手。こんな些細なことで揺らいでしまってどうするというのだ。こんなことで勇者を、世界を護れると思っているのか。
ベロニカはゴシゴシと乱暴に涙を拭って、濡れた瞳で鏡を睨みつけた。
こんなのはあたしじゃない。こんな弱いあたし、あたしが許せない。
キッと鏡を睨みつけてもそこに映るのは、涙に揺れる瞳をした小さな女の子だ。このままではいけない。ベロニカはごそごそと鞄を漁って小さな手帳を引っ張り出した。それにはベロニカが旅に出る前から書き溜めた、いつか役に立ちそうだと判断した書物の知識が書き写されていた。それをパラパラと捲り、あるページで手を止める。そこに書いてあることにざっと目を通し、ベロニカは深呼吸してもう一度鏡と見つめ合う。
こんなあたしは嫌だ。もう、何にも揺らぎたくない。
そのページに書いてあったのは自己暗示のかけ方だった。ベロニカ

は手っ取り早く解決する方法を選んだ。平時であればカミュと、この気持ちと向き合うのも良いのかもしれない。いや、本当はその方が良いに決まっている。でも今はそんな時じゃない。自分を優先して、勇者を、世界を後回しにして良い筈がない。魔に付け入れられる隙間を持っていたくはない。それは自分も、仲間をも苦しめることになるかもしれないからだ。
だからベロニカは決めた。
こんな自分を封じよう。
弱い自分を奥底に沈めて、忘れてしまおう。
ベロニカは鏡の自分と眼を合わせ、己を丸め込む。
忘れよう、忘れてしまえ、こんな気持ちもこんな想いも何もかも。
こんな弱い気持ちなんて要らない、必要ない。消えろ、消えてしまえ。
そして催眠を解くキーワードを考える。少しだけ逡巡して、ベロニカはふっと諦めたように笑った。
あいつがあたしに絶対に言わない言葉。今のあたしにはこれがぴったりね。
こんな言葉はカミュから聞いたことも、自分から言ったこともない。これならば早々解けることはないだろう。
かかったかどうか自分では分からないが、とりあえず眼を冷やさなければと冷たい水を求めて部屋を出た。腫れてはいないだろうが、少しでも赤くなっていたら、あの敏い男は気にしてくるかもしれない。そうなればまた面倒だし、喧嘩をする気力もない。

そうやってベロニカは淡く色付く温かいものに無理矢理蓋をした。

※※※※※

どうにも最近ベロニカの様子がおかしい。
そんな気がしてカミュは頭を捻った。
相変わらずカミュやイレブンに対して姉ぶり、揶揄いにも良い反応を見せる。が、何かが違う。カミュを見つめる視線に熱がない。別に視線に熱も何もあったもんじゃないと思いはするが、それが一番

しっくりくる表現だとカミュは思った。
カミュを見つめる物言いたげな潤んだ瞳。熱を孕んだアメシストがゆらゆらと揺れる様を見るのがこの上なく愉快で堪らなかった。
それがこの間の休み以降、全くその素振りを見せやしない。あの喧嘩は自分も言い過ぎたかなと思い、その後ベロニカに謝りに行ったのだが「あたしも悪かったわ。これでお終いにしましょ」と意外なほどケロッとした顔で言われてしまってはそれ以上追求出来やしない。深刻に捉え過ぎたかな、と思っていたのだが、やはり何かあったのだろうか。

悩んでいても顔に出さないのがカミュという男だ。いつもと同じ様に振る舞ってみせることなど朝飯前。仲間はそんなカミュに気づかずに迷宮を踏破していく。
ベロニカをじっと見つめても何も変わらない。そこには幼い姿をした、赤い魔女が居るばかり。
「…なによ？」
「いんや、おチビちゃんは疲れたんじゃねぇかなって」
「チビは余計。まぁ確かに疲れたわね」
「ん。とっとと片付けるか」
「そうね」
こんな会話も何だか気が乗らない。
俺も疲れてんのかね。
そんな思いを抱えたまま賢者の試練を終えた頃、もう一度休憩を挟もうと仲間から声が上がり、一同は試練の里を後にしたのだった。

休憩はシルビアの希望もあって、ソルティコで取ることになった。不思議な空間で縦に圧迫感は無いとはいえ、迷宮に長いこと潜っていたのだ。広い空に広い海を見たくなっても仕方ない。シルビアに反対する者が居る訳なく、ソルティコに降り立った一同は前回と同じく各々の目的を持って解散した。

やはりおかしい。
あのベロニカが。普段からぎゃんぎゃん煩く、小賢しいあのベロニ

カが。カミュが街の女に声をかけられていても怒るでもなく、よく回る口を機関銃の如くぶちまける訳でもなく、ただ冷めた目線を投げかけただけでその場を去って行ったのだ。
それはさながらぱふぱふを堪能してきたイレブンに向けるものと瓜二つであった。
他のメンバーが居たのならこの非常事態に賛同してくれたのだろうが、残念ながら今日は他の連れも無くカミュ一人きりだ。

「おい、ベロニカ」
声をかけてきた女を適当にあしらい、その場を去ったベロニカを追いかけ小さな肩を掴む。
「なあに？」
くるりと振り返ったベロニカの瞳は普通のもので逆にカミュの方がぎくりとしてしまう。
「な、なにって、いつもみたく怒んねえのかよ？」
「なにそれ。アンタあたしに怒られたかったの？それは知らなかったわ」
良い揶揄いのネタを見つけたとにんまり笑うベロニカは、確かにいつものベロニカと同じだった。いつもとは仲間と普通に行動していたり、戦闘時だったり、とにかくカミュが女に声をかけられていない時のことを言う。それほど今のベロニカは普通だった。カミュに姉ぶりたくて、カミュよりも上に立っていたい普通のベロニカだ。
カミュが思考の渦に囚われていく間もベロニカはああだこうだと上機嫌に話している。カミュを揶揄うネタが出来たことが相当嬉しいらしい。
散々好き勝手言った後、流石にカミュが無反応なことに気付いたらしく「アンタ、どうしたの？大丈夫？体調悪い？」などと気遣われてしまった。それに曖昧に答えたカミュは疑念を確信に変えた。
並んで歩く、自分よりも随分下にある小さな頭を見つめ考える。
ベロニカに何かあった。オレに興味を失くす何かが。
カミュの不安は寄せては返す波のように段々と大きくなっていった。

※※※※※

その夜。シルビアとグレイグ両名のオススメの酒場で夕食に舌鼓を打った。賢者の試練でベロニカの装備のレシピが手に入ったので、戻る前にクレイモランに行こうだの、迷宮内のメタルを積極的に狩ってみたらどうだだの、もっと強い武器が欲しいだの、温泉に行きたいだのスイーツが食べたいだの新しい衣装が欲しいだの良い具合に酒が入った所でベロニカがそろそろ休むと言って席を立つ。それに倣うようにセーニャも立ち上がり、姉妹連立って宿に引き上げて行った。

その後ろ姿を言葉も無く見送ったカミュは、イレブンの腕を取りカウンターへ無理矢理引っ張って行く。
「ちょ、なに？どうしたのさ？」
困惑するイレブンに応えず背の高いスツールに座り、一番弱く甘ったるい酒と、一番強く辛い酒をバーテンにオーダーする。その姿に渋々イレブンが隣に腰を下ろした。
「皆には聞かれたくないこと？」
首を傾げるイレブンの髪がサラリと揺れているのを横目で見つつ、目の前に置かれたグラスの中身を一気に呷り、お代わりを頼む。そのカミュの様子に軽く息を吐いて、イレブンは出されたグラスをくるくると弄んだ。カランコロンと丸く削りだされた氷が涼やかな音をたてる。
「このお酒、ベロニカみたいだね」
そう言ってふにゃりと笑うイレブンが持つ酒は、青藤と言うのだろうか、ブルーパープルの色をグラスに反射させていた。
ばぁ〜か。あいつの眼はもっとキレイだろ。
それを言葉にせず、カミュは大きな溜息、もとい深呼吸をし、頬杖をついて一言。
「…あいつ、最近なんか変じゃね？」
「あいつってベロニカ？」
「そ」
「うん…そうだね。ぼくもちょっと気になってたんだよね、元気な

いかな？って。導師の試練の後さ、ダーハルーネに寄ったじゃない？その時からじゃないかなぁ、なんか元気ないの。いや、なんとなくだよ、なんとなく」
その言葉にズルリとカミュの頬杖が外れる。
いや、こいつなんでそんな詳細に分かるんだよ。
カミュとしては普段通りにやってきたつもりだし、他の仲間は多分気付いていない。カミュだとてなんとなくおかしいな、と思う程度であったし、恐らく気付いたとしてもセーニャくらいだろうと高を括っていたのに、とんだ伏兵がいたものだ。
「…カミュ、まさかぼくのベロニカになんかしたの？」
「は？なんもしてねぇわ。ってかお前のもんじゃねぇだろ」
ラムダの、命の大樹に登った辺りから、ベロニカに対して過保護になったと思ってはいたが、勘違いでは無かったようだ。 イレブンがベロニカをどう思っているのかは知らないが、その執着心はどこか空恐ろしいものがある。
「何にもしてないの？ほんとに？」
「何疑ってんだよ、マジだって。でなきゃセーニャにボコられてんだろ 」
そりゃそうかと、乗り出していたイレブンが元の位置に戻る。
何かって何だ。あんなおチビちゃんに何もするもんか。そもそもしたくても出来ないだろう。いくらなんでも幼過ぎる。
そこまで考えてカミュは慌ててその考えを打ち消した。何考えてんだ、ほんとに。
「なんかさぁ、なんか変なんだよな」
「そうだねぇ」
「怒りっぽいのも単純なのも、揶揄い甲斐があるのもいつも通りなんだが、違うんだ。あいつの、眼が違う」
「眼？」
「なんか熱がないっていうか、つまんねぇんだよ」
「…それは、ぼくには分からないんじゃない？」
「そうかねぇ…」
「そうだよ。ぼくに対しては普通のベロニカだし。あんなに喧嘩するのもカミュとだけじゃん。とにかくさ、ベロニカと話してみた

ら？案外こんなもんかってなるかもよ？」
「…あいつとオレが勇者様お墨付きの喧嘩も無しで話し合えると思うか？」
「そこはカミュが引いてあげなよ。お兄ちゃんでしょ」
「やめてくれ」
イレブンの言い分に乾いた笑いを零し、酒を呷って尻を浮かせる。
「行くの？」
「ああ。ま、どうなるか分からんけどな。ちょっと話してみるわ。起きてたらな」
「うん。喧嘩しちゃダメだよ。優しくするんだよ」
「ははっ。善処するわ」
そう言って手をヒラヒラさせカミュは酒場を後にした。その後ろ姿を見送ってイレブンは溜息をこれみよがしに吐いた。
そんなの、ベロニカはカミュのことを好きって言ってるようなもんじゃない。視線が熱い、なんてさ。熱視線、なんて言葉あるんだから。なんでカミュも気づかないのかな、馬鹿なのかな。
なんにせよ、あの二人が向き合うというのなら止める理由はない。大喧嘩にならなきゃいいな、と、大分薄くなってしまった酒を飲み干した。

※※※※

港町、加えて観光地のソルティコも流石の邪神には勝てないようで、夜の街はひっそりと静まり返っている。住民に普段通りの生活を、との考えなのかカジノは通常営業中だが、それでも夜になればいつもより人気が少なくなる。
当然宿に泊まっている人も少ないのだろう。まだ宵の口だというのに、宿は沈黙を守っていた 。ベロニカとセーニャに割り当てられた部屋へ進む足運びも心持ち慎重になってしまう。
こんな夜に、ベロニカと喧嘩をしたくないな。
何故かそんなことを思った。ベロニカと喧嘩するのは楽しい。自分が色々背負ったカミュではなく、何処にでもいる19歳の只のカミュになれる気がするからだ。小気味良い言葉の応酬が楽しくて楽しく

て、腹の底から笑ってしまう。
それでも今日だけはベロニカとちゃんと話し合いたい。
どうして最近連れないのか。自分のことをどう思っているのか。自分のことはどうでもよくなってしまったのか。
そこまで考えて頭をガシガシ掻き回す。
なんだよ、これ。これじゃあオレがベロニカのことを。
ふと頭に湧いた淡い光を掴む前に、カミュの眼がベロニカを捉えた。
ベロニカは廊下の端のベランダに佇んでいた。備え付けの椅子に膝立ちになり、手摺に腕を預けている。解かれた金糸の髪が月光に煌めいて、風で揺れる度にカミュの眼にチカチカと閃光が迸る。宿の備品であろう白いワンピースのネグリジェを風にはためかせ、上機嫌に鼻歌を歌い、歌に合わせて小さな頭が左右に揺れる。
そのあまりにか細い後ろ姿にガツンと殴られたような衝撃を受け、カミュはストンと全てを受け入れた。
二度と失いたくない。ベロニカを脅かす全てから、他の誰でもなく自分の手で護ってやりたい。その指で触れて欲しい、此処に居るのだと、何処にも行かないのだと証明して欲しい。
分かってしまえば、もう、全てが愛おしかった。
嫌いだった黄金の髪も、煌めく宝石の瞳も、文句ばかり言う桃色の唇も、細い腕も白い首も、生意気さも聡明さも「カミュ」と呼ぶ優しい声色も、全てが愛おしい。
なんだ、オレ、マジかよ。
だから目線が熱ぽかったのか。オレも同じだったのか。お互い良く見合っていたから、分かってしまったのだ、視線の熱さなんて、そんなことを。
人の機微には敏感な筈だったのに、自分が当事者になってしまえばこんなものか。あの態度、イレブンは分かっていたな、とカミュは苦笑を漏らし、気配を絶ち足音を消してベロニカに一歩、また一歩と近付く。
だからこそ解せない。最近のベロニカの態度が今までと180度違うことが。興味を失ったのならそれでいい、なんて思えるものか。

「ベロニカ」
声をかけて逃げられないよう、ベロニカを囲う檻のように手摺に手を置いた。
突然現れたカミュに驚きはしたものの、そこまで慌てるでもなくベロニカがカミュを見上げる。
「驚かさないでよ」なんてしれっというベロニカにカミュの胸がきゅっと傷んだ。こんなに肉薄しているというのに、ベロニカは照れるでも慌てるでもない、全くの通常状態だ。
こうなればヤケだと、金の丸い頭に顎を預けごりごりと揺らす。それにもベロニカはクスクス笑うだけで面白くない。面白くないが、キャンプではこれくらいのスキンシップ等当たり前にやっていたのだから自業自得だ。
仕方ない。仕方ないので心持ちベロニカに体重をかけ、少し冷えた身体を風から守ってやる。

「なあベロニカ」
「なあに？」
「お前、最近変だよな」
そのカミュの言葉にベロニカは明らかに身体を固くした。
おいおい、それじゃあそうですって言ってるようなもんだぜ。
「変ってなによ、何が変なのよ」
「オレが女と話してても文句言わないよな」
「は？良いでしょ、別に。アンタだって迷惑がってたじゃない」
「そうだとしても、どうして急に止めたんだよ」
「やっぱり大人気無かったかなって。あたしだって大人のレディなんだからもうちょっと上品にしようかしらって」
「そうだな。確かに言いがかりだったもんな」
「…その言い方には引っ掛かりを覚えるけど、まあ良いわ。そんな訳でこれからは何も言わないから好きにしなさいよ。あたしも好きにするから。…きゃっ！」
そこまで聞いてカミュはベロニカの脇に手を差込みひょいと抱き上げた。目線を合わせ、ギラリと睨みつける。その常ならぬ形相に流石のベロニカも肩を一つ震わせ、それでも虚勢を張ることを忘れな

いとでも言うかのように、声を荒げた。
「な、なによ！」
「いんや。それ本気かなって」
「ほ、本気に決まってるでしょ」
「お前も好きにするから、オレも好きにしろって？」
「そうよ！何か問題でもあるの？」
「あるね」
「なによ、何が問題なのよ。言ってみなさいよ！」
「オレがお前を好きだからだ。だからお前に好き勝手されるのは嫌だ」

「…………は？」

たっぷり10秒程止まって、言えた言葉はそれだけだった。
「お前な、人の一世一代の告白に対しては？ってなんだよ、は？って」
「いやいやいや！分かったわ！ドッキリ！ドッキリね！？なによ、誰に負けたの、カミュ。シルビアさん？マルティナさん？大穴でイレブン？」
「賭けてもねぇし罰ゲームでもねぇわ。本気だっつの」
「…………は？」
「そんなに信じらんねぇの？ちょっと傷付くわ」
ふ、と寂しそうに笑うカミュに、ベロニカの体温がじわじわと上がっていく。
「お前が信じられなくてもそうじゃなくても、オレはお前が好きだ」
「…仲間として、」
「な訳あるか。一人の女としてだよ」
「え…ロリ、」
「じゃねえし、お前が一番言ってんだろ！立派なレディだって！オレは！お前のことを女として好きだって言ってんの！キスしてぇし抱きてぇわ！そういう好きだわ！」

カミュの叫ぶような告白を聞いてベロニカの中で鍵がカチリと外れる音が鳴り響く。
その途端、カミュに対する愛おしさだとか寂しさとか切なさとかそういったものがぶわりと巻き起こってベロニカは顔を覆ってうつ向いた。
「返事は」
「や、今は、ちょっとムリ、です…」
返事など聞かなくとも真っ赤になった耳がベロニカの気持ちを教えてくれる。それに気を良くしたカミュは調子に乗ってその赤く染まった耳にちゅっと吸い付いた。
「ぴゃあ！」
「なあ、なんで急に態度変えたんだよ」
「あ、あんた、今、耳に、みみにっ！」
「お気に召したンならもう一回してやろうか？」
「いい！いいから…っんぁ！」
「なあ、なんで？」
「耳元で、喋んないで…！」
びくびくと震える真っ赤なベロニカが面白くてついつい耳に吸い付いてしまったが、これ以上やるとメラが飛んで来そうなので唇を離し、ベロニカを抱いたまま椅子に腰掛けた。
「さて、ベロニカさん。質問に答えて貰おうか」
にっこりと笑ったカミュに逃げられないことを悟ったベロニカはこれまでの経緯を洗いざらい吐き出した。

※※※※

「おま…そんな理由で？」
「そんな理由っていうけどね、あたしにとっては天地がひっくり返るくらいの衝撃だったのよ！」
カミュの膝の上で顔を赤くしたベロニカは、偉そうに腕を組んでふんぞり返った。そんな様子も愛らしいが、まさか自己催眠をかけていたとは、流石温室育ちのお嬢様は何をしでかすか分からない。
「で？結局オレ達両想いなの？」

「…わ……ない」
「あ？」
「分かんないって言ったの！こんなこと初めてだし！あんた見るだけで勝手に動悸はするし、急に嬉しくなったり悲しくなったりするし！魔法を使うには精神のコントロールが一番重要なのよ！？それなのに一緒に闘うあんたと居て感情がコントロール出来ないなんて死活問題だと思ったの！こんなことラムダに居る時には無かったのに！…無かったのに、ほんと…意味分かんない…」
それ、もうオレのこと好きって盛大に言ってるじゃん。
ぽしょぽしょと口の中で文句を言っているベロニカの態度に顔がニヤけるが、必死にそれを押し隠す。ベロニカの言葉からしてラムダでは全く色めいたことは無かったらしい。と、言うことはカミュが初めてということだろう。これは是非とも自分で自覚して頂きたい。教えてやることは簡単だが、初めてだというのであればそれを大いに楽しみたい。まあカミュもこんなことは初めてでベロニカに偉そうなことは言えないのだが。

「な、ベロニカ」
「なに？」
「あのさ、前にも言ったけどセーニャみたく可愛く出来ないのかって、悪かったな」
「良いのよ。皆セーニャみたくなれってあたしに言うもの。同じ顔してて気が強いのとおっとりしてるのどっちが良いなんて、分かりきったことよ」
「それでも悪かった。意地が悪かったなと、思う」
「…あたし、セーニャになりたいって思ったことはないわ。あたしはあの子を守ってあげたいんだもの、ちょっと気が強いくらいで良いの」
「オレはそんなお前が好きだぜ」
「…」
「気が強くて向こう見ずで、人の心配ばっかしてて、自分よりもセーニャが一番のお前が好きだ。そんなお前だから側で護ってやりたいって思ったんだ」

「うん…ありがとう」
「返事はいつか聞かせてくれよな。邪神倒して落ち着いてからでいいからよ」
そう言うとカミュはベロニカを抱きかかえたまま立ち上がった。海からの風はじわじわと体温を奪っていく。このままではベロニカが風邪を引いてしまうかもしれない。今日のところはそろそろ休んだ方が良いだろう。
スタスタと暗い廊下を進み、ベロニカの部屋の前を当たり前のように通り過ぎる。
「え、カミュ、あたしの部屋そこよ？どこ行くの？」
その質問には答えず、辿り着いた自分の部屋に入り、慌てるベロニカをベッドにぽんっと投げ出す。扉に鍵をかけ、ついでに外側から開けられないように椅子で固定する。これでイレブンが帰ってきても入れはしないだろう。
すまん相棒。どっかで休んでくれ。
「ちょっと！なによ、これどういうこと！ここあんたの部屋じゃない！扉にそんなことしたらイレブンが入ってこれないでしょ！聞いてるの、カミュ！」
くるりと振り返ったカミュの笑顔が何故だが怖い。ベロニカは咄嗟に逃げようとしたが、そこは大人と子供。あっさり捕まり抱えられ、またしてもベッドに下ろされてしまった。ジタバタ暴れてみてもカミュはけらけら笑うだけで一向に離そうとしてくれない。
「は〜な〜し〜て！！」
「なんもしやしねぇよ。あそこに居ても良かったけど、少し寒かっただろ？お前にまだ聞きたいことがあっただけだ、な？」
「じゃあなんで扉開かないようにすんのよ！」
「…なんとなく？」
「なんとなくってなによ！なんとなくって！」
「ベロニカ」
「なによ！」
「お前、催眠解けったって言ったよな？なんで？どうして解けたんだ？」
「へ？」

急に投げかけられた質問にベロニカの動きが収まる。しめしめとカミュがほくそ笑んでいることに気付きもしない。大人しくなったベロニカを抱え直して再度同じ質問をする。
「…解除のキーワードをあんたが言ったからよ」
「解除のキーワード？」
「そう、結局精神を抑圧しているようなものだからね。解けるようにしておかなきゃ危ないのよ」
「ふ〜ん。で？」
「で？ってなによ」
「いや、解除のキーワードって？」
「…ないしょ」
「なんだよ、気になるだろ」
「ないしょったらないしょなの！良いでしょ、なんでも！」

ベロニカが決めた言葉は"カミュ"が"ベロニカ"に"好き"と言うことだった。
高を括っていたのだ。まさかカミュが散々お子様扱いして、いつも喧嘩ばかりしているベロニカに"好き"と言うなんて、そんなこと有り得ないと思っていた。それなのにカミュは何を思ったかベロニカに好きだと告白してきたではないか。ベロニカは本当に驚いた。また何か揶揄われているのではないか。普段の二人からして疑うのは当然だろう。
でも、カミュは本気だった。本気でベロニカを好いていると、手に入れたいと言ったのだ。ベロニカはそれに動揺し、完璧に隠した淡い想いが蘇った。
それからはこの有様だ。カミュに良いように揶揄われ、弄ばれている。それを悪くないと思ってしまっているのだから余計始末が悪い。
ベロニカにはカミュが言ったような感情は良く分からない。好きってなんだ。イレブンやセーニャを好きだという気持ちと何が違うと言うのだ。
分からない。分からないけれど、カミュと居るとドキドキする。嬉しいし楽しいし、悲しいし辛い。それなのにもっともっと一緒に居

たい。どんなに辛く苦しくとも、カミュの側に居たい。どんな時も寄り添っていたい。
それが、好きだと言うことなのか。

「な〜な〜、何なんだよ、キーワードって」
「うるっさいわね！考え事してるの！静かにして！」
「ほ〜お？お前がそういう態度ならこっちだって黙っちゃいないぜ？」
「はあ？ちょ、やめ、きゃははははは！やめなさっ！あは、あははははは！！」
「ほれほれ、言わねぇともっと凄いとこ擽るぜ」
「やめっ！やめて、あっはははははは！しんじゃ、あはははははは！」
「良い反応するなぁ、お前」
「やめ、やめ…あはははは！あは！……あんっ！」

宿に帰ってきたイレブンは部屋の扉が開かないことに大層狼狽えたが、中から聞こえてくる二人のじゃれ合う声に中に入るのを諦め、シルビアとグレイグの部屋の扉を叩いた。突然やって来た勇者に二人は驚いたが、イレブンが大仕事をやり遂げたような満足した顔をしつつもどこか遠い目をしていたので、何も聞くことが出来なかった。
さて、二人はどうなったのかな。
明日はカミュを問い詰め、大いに揶揄ってやろうと、狭いベッドにグレイグと同衾しながらイレブンは心に決めた。ぜってぇ許さねぇからな、と。

ーーーそして、夜が明けた！